探訪　広まるSDGsへの取り組み

学生服の現場から

横浜市立西本郷中学校

横浜市南部の栄区。緑豊かな自然環境に囲まれた閑静な住宅地に建つ市立西本郷中学校。創立40周年を迎えた今年の生徒数は457人。教職員、保護者、地域との連携で、目の前の子供一人一人の成長を大切にする「生徒の成長ファースト」を実践する教育活動に取り組んでいる。

山下昌永校長

閑静な住宅街に建つ校舎

3年間の成長像を明示

2017年に赴任した山下昌永校長は、中学3年間で目指す生徒の成長像として「人とのつながりを大切にする思いやりある生徒」を示す。そのために必要な自立、礼儀、貢献の視点から、学校教育目標には「自ら挨拶」「自ら判断」「自ら行動」を掲げる。さらに学区内の小学校とともに、小中9年間の一貫教育の推進に向けて、コミュニケーション能力を高め、「まち」で生きる子供たちの育成を目指す。

文化・スポーツ活動では、17年に子供の読書活動優秀実践校として文部科学大臣表彰を受賞、18年には全国中学ビブリオバトル決勝大会出場の実績があるほか、今冬の第103回日本陸上競技選手権大会室内競技に陸上4種競技で出場している。他に卓球や吹奏楽部、サッカー、野球、バスケットボールなどの競技も盛んだ。

LGBT対応への声

山下校長の赴任後、しばらく経つと、学校内で、スカートに抵抗を覚える女子が増えてきており、性的少数者（LGBT）への配慮をする必要があると教員からの報告があったため、標準服の変更を進めることにした。

「変えるに当たっては、より意味のあるものにしたいと思った」と山下校長。LGBT対応と合わせ、より機能性の高い素材を使い、デザインも今の時代に合わせたシャープなスタイルを取り入れることで学校のブランド力向上にもつなげたいと考えた。

以前、標準服の変更を行った経験がある山下校長と、当時の副校長が直接の担当となり、教員やPTA役員らとの協議を半年ほどかけて進めた。ある程度の方向性が見えた18年8月、標準服のマイナーチェンジを目的としたコンペを学生服メーカー3社で実施。総合評価でオゴー産業（岡山県倉敷市）が提案した標準服が選定された。

デザイン、シルエットに加え、ウオッシャブルでありながらの撥水（はっすい）撥油機能の標準装備、SDGs（持続可能な開発目標）への取り組みの面が高く評価された。特にSDGsについては「LGBT対応や再生ポリエステルを使用したエコ素材の生地『セーブ・ザ・チルドレン』ブランドを通して世界中の子供たちに支援のつながりができることが大きかった」と山下校長は話す。

（左から）男子、女子スカート、女子スラックス標準服

最後までこだわったボタン

コンペ後は、教員やPTA役員らとともに生地の色味の選定に着手。当初意見が分かれることもあったが、ブレザーについては、これまでの紺より、より深い濃紺とした。スラックス、スカートは従来のグレンチェックの生地のベースは変更せず、スクールカラーでもある緑のラインをアクセントにしてデザイン性を向上させた。

当初、生徒たちのデザインでエンブレムを製作するという構想もあったが、今回は間に合わなかったという。その代わりこれまでの標準服ではつるつるとした銀色だったボタンの変更については最後までこだわった。さまざまな意見が出され紆余（うよ）曲折もあったが、最終的にデザインはメーカーに一任し、色味は製造ラインに入る直前の19年末まで検討を重ねた結果、「絶妙な金色」（山下校長）を採用することになった。

プリンセスラインで引き立つ

今年度から着用となった新標準服。ブレザーはウエストラインを絞ることで、すっきりとしたシルエットに見える女子のプリンセスラインが特に好評だ。スカートもボックスヒダから16本の車ヒダに変更して、より洗練されたデザインとなった。男女ブレザーのポケットは、スーツのように胸が箱ポケット、脇は切りポケット雨ぶた付きに変更。新たに女子スラックスも追加した。

車ヒダを16本にして洗練さを出した

これまでの標準服と比較して、生地やデザイン性、シルエットなどは改良されたが、ベースの色を大きく変更していないことで、旧標準服のリサイクルやお下がりも着ることができ、保護者の経済的な負担を軽減できるように配慮した。

本来なら4月から新たな標準服を着用した生徒たちが学校で見られるはずが、今年は新型コロナウイルスの感染拡大により、登校は6月からとなった。夏を経て、これから新ブレザーに袖を通すのを楽しみにしている生徒たちも多いに違いない。